

二〇二六年度二月入試（外国語・英語）解答

問 1

彼の時評は、雑誌「太陽」を通して、多数の教養ある読者の目にふれたが、この「太陽」には、英語版の増刊号 Sun Trade Journal (のちの The Taiyo) があって、政治的、経済的、一さらにはある程度の文化的、社会的—記事を日本駐在の外国人事業家に提供していた。(同意可)

問 2

今は移行と変容の時代であり、革命と画期の時代であり、進歩あるいは退歩の時代であり、すなわち国民の内面的生活の面、つまり、極東の新興国家を構成する一人一人の人間の信仰や感情面での危機あるいは頂点であり、この国家の運命たるや、全世界にとって依然として未知数であり謎なのである。(同意可)

問 3

西洋列強はわれわれを日露戦争以前と同じ立場では眺めていない。日本の外交面でのこの変化は誰の目にも明らかであるから、贅言は要さない。(同意可)

問 4

しかし日本の内面的な生活について言えば、西洋にはこれまで気づかれずにきた、政治上の変化よりもはるかに重要で、しかも興味深い変化が起こりつつある。(同意可)

問 5

しかしながら、その主義は、本質的には、ゾラの説く写実主義以外の何ものでもない。この流派の作家たちは、自分たちの目的があるがままの姿の人間を描くこと、つまり、真実の立場で世界を表現し、真実を探求してあらゆる偽りの因習を踏みにじることだと宣言している。(同意可)

問 6

煎じ詰めれば、それ（自然主義）は裸体崇拜にすぎないのである。裸体崇拜者たちがその活動を芸術や文学の領域に限ってくれていたならば、害悪はこれほどまでにひどくはならなかったことだろう。しかし日本では、その主義は小説にかぶれた多数の青年によって一歩先まで押し進められて実践に移された。(同意可)

二〇二六年度二月入試・外国語（日本語）

問題一

- I 心にわきおこる感情の複雑で微妙な部分
- II ハニカミの元の意味が相手を威嚇する態度であったように、一見女性的で優しい表情の裏に、絶対に内面を相手には見せないし、見せても分からないだろうという気持ちが隠れているから。
- III 敬語において相手を敬うということは、感情のありのままの表出を抑え、距離感をとることが、公の場における相手への敬意や配慮になるという原理に支えられていると考えられるから。
- IV 「いじらしい」という言葉が本来持っている自分の意地をつらぬこうとする自閉した姿勢が、外側からみると、そういった人間に対して、いたわりやいとしさの感情を誘発するため、けなげでいたわしいという意味に転じた。
- V
- ア どうけ イ と（んだ） ウ 内向 エ 一途

問二

以下の2点を含む文章を作成すること。

①この文章は、日本社会の持つ「情緒共同体的な構造」を主に言語の面から複数の実例を挙げながら論じたものなので、この主題に関わる形で実例を要約しながら紹介する。

②そのうえで、日本における生活から考えたこと、あるいは母語の言語文化との関係を材料にしながら、自身の考えを論理的に述べる。

なお、日本語の試験なので、文法、語彙、表記、書式について不備があった場合は、減点の対象とする。

【国文学】

一

I 群

a (高橋虫麻呂)

奈良時代、『万葉集』の歌人である。自らの歌をまとめた「高橋虫麻呂歌集」があったが散佚した。常陸国に赴任したこともあり、旅の歌や地方の伝説を詠んだ歌が多い。葛飾の真間手児奈や水江の浦島子などの伝説を題材とした歌や、筑波山の歌垣を詠んだ歌などが代表作として知られている。

b (『更級日記』)

平安時代の仮名日記。成立は一〇六〇年頃で、作者は菅原孝標女である。内容は、十三歳の時、父の赴任の地であった上総国から上京した旅に始まり、夫と死別した翌年の五十二歳までの半生を回想した記録となっている。物語への憧れと耽溺、宮仕えの経験、晩年の不幸と信仰が描かれている。全編に夢の記事が多いのも特徴である。

c (『今昔物語集』)

平安後期の説話集で、編者は未詳である。全三十一巻を、天竺・震旦・本朝の三部に分け、さらに各部を仏法と世俗に分ける。当時の全世界を説話によって描こうとする試みであった。仏教史の概略を描くとともに、その外側にある世俗の様々な身分の人々の説話を収録し、奇怪で不思議な話を多く載せる。

d (藤原俊成)

御子左家の平安末期の歌人である。崇徳院に見出されて『久安百首』の部類を行って以降、九条家歌壇、後鳥羽院歌壇に至るまで和歌界を主導した。勅撰和歌集では、『千載和歌集』の撰者となり、『六百番歌合』など歌合判者も多く務めた。和歌表現では、優艶な古典撰取の方法を確立した。歌論書には『古来風躰抄』がある。

e (不易流行)

蕉風俳諧における俳諧の基本的理念を表す俳論用語である。「不易」つまり時代を超越して不変なるものと、「流行」つまり変化してゆくものとは、本来対立するものではなく、不易即流行、流行即不易であり、両者は相即するものであるとする。背景には、宋学からの影響があったと考えられる。

II 群

a (戯作)

洒落本や滑稽本、読本など、江戸期の通俗的読み物を指している。ただし仮名垣

魯文の存在が示すように、明治に入って即座に戯作の流れが絶たれたわけではない。しかし坪内逍遙『小説神髓』や硯友社を批判した自然主義文学など、戯作を否定することで自立しようとしたのが日本の近代文学の主流だった。

b (『明星』(第一次))

明治三三年に創刊された、新詩社の機関誌。与謝野鉄幹主宰。詩歌を中心とする。ロマン主義文学運動の中心として、与謝野晶子、山川登美子、北原白秋、石川啄木、木下杢太郎、吉井勇、佐藤春夫など、錚々たるメンバーを集めたが、明治四年に廃刊。その人的ネットワークは『スバル』に引き継がれることになった。

c (『四季』(第二次))

詩雑誌。昭和初期に『詩と詩論』を中心として展開された主知主義や超現実主義に対するアンチテーゼとして、昭和十年代の抒情詩復興の機運を支えた。主な詩人に堀辰雄、三好達治、丸山薫、津村信夫、立原道造、中原中也。また萩原朔太郎や室生犀星も参加し、『感情』以来の抒情詩の系譜を印象づけた。

II

I

問一

二条のきさきさのとう宮のみやすむ所ときこえ

ける時正月三日おまへにめしておほせごとある

あひだに日はてりながら雪のかしらにふりかゝり

けるをよませ給ける

文屋やすひで

春の日のひかりにあたるわれなれどかしらの雪となるぞわびしき

雪のふりけるをよめる

紀のつらゆき

霞たちこのめも春の雪ふれば花なきさともはなぞちりける

問二 春の日の光は、東宮および東宮の御息所(二条后)の恩恵の比喩である。

問三 「かしらの雪」は白髪を意味するが、このように白髪を雪に見立てる表現は、漢詩文に前例がある。

問四 まだ花の咲いていない初春の里に、雪が花のように降っている、という風景。

問五 霞が立って、木の芽も張る春の雪が降ると、花のない里にも花が散っているように見えることだよ。

II

問一 たとえば没理想論争当時の森鷗外が「エミル・ゾラが没理想」を記したよ

うに、明治二十年代にはゾラの文学思想や技法はかなり知られていた。しかしゾラの文学がとりわけ積極的に摂取されたのは明治三十年代の、いわゆる前期自然主義においてのことである。その影響が殊に顕著な作としては、小杉天外の『はつ姿』や『はやり唄』、田山花袋の『野の花』序文や『重右衛門の最後』、永井荷風の『地獄の花』の名があげられる。しかし自然主義の力点が科学的・実証的なものから個人的・内面的なものへと移行し、それに応じて理想とされる小説のイメージも変容していった結果、ゾラは範としての地位を失うことになった。

問二 (同時代) マルクス主義文学者。

問三 室生犀星や正宗白鳥、志賀直哉といった、現実生きる者としての作家の、個性的な人となり——作家の顔——がそのまま感得されるような文学作品。

問四 論述問題につき割愛。

【三】
論述問題につき割愛。

【国語学】

問題一

ア (連声)

母音または半母音に始まる音節が、 ㄹ 、 ㄴ 、 ㄷ に終わる音節に続く場合、その末尾の音と同化して、 ㄹ 、 ㄴ 、 ㄷ に始まる音に変わる現象。三位(サムキ↓サムミ)など。

イ (あゆひ抄)

富士谷成章により著された「あゆひ(助詞・助動詞類)」の意義・用法を解説した文法書。安永七(一七七八)年刊行。「名・装・挿頭・脚結」という品詞分類を示すとともに、装の活用表、五十音図を示すなど、今日的観点から見ても、研究史上きわめて価値が高い。

ウ (破擦音)

破裂音の閉鎖が開放されるときに、同じ調音の位置で摩擦が伴った音。この場合、両者を2つの音と捉えず、音声学的には1つと考える。日本語の「夏 [natsumi]」における [ts] など。

エ (存在詞)

山田孝雄の文法論における用語。山田は用言を動詞・形容詞・存在詞に分類し、このうち存在詞は、属性を有さず、存在のみを示す「あり」「ある」と、それが他の語についたもの(形容詞の補助活用など)、口語の「だ」などが、そこに含まれるとした。

オ (橋本進吉)

明治後期から昭和前期に活躍した国語学者で東京大学で教鞭を執った。音韻史を専門とし、上代特殊仮名遣いの再発見、キリシタン資料の語学的研究などを行った。また、文節を基本とする文法論を展開し、教科書『新文典』を編纂。その考え方は、文部省編『中等文法』にも引き継がれ、いわゆる学校文法に影響を与えた。

問題二

ア

平安時代には、一般に連体修飾の機能を持つとされる「が」が、
①どのような経緯で主格用法を持つに至ったか。
②いづごろ接続助詞用法を持ったか。
という2点について概観するとともに、類似の機能を持つ「の」「と」の間に、各時代、どのような用法の相違があったかを論じる。

イ

現代日本語語彙の中で基礎語彙を担う和語に対して、漢語がどのような位置を占めているかを概観したうえで、
①いわゆる旧漢語は、いづごろからどのように日本語語彙の中に流入したか。
②いわゆる新漢語が、江戸時代以降、どのようなソースから日本にもたらされたか。
の2点から論じる。

ウ

明治後期に完成に至る近代文体として、たとえば「言文一致体（口語体）」と「明治普通文（明治文語）」を取り上げ、
①言文一致体の成立と標準語法の成立の関係。
②明治普通文の語法と明治以前の文語文との相違。
を中心に、小説、論説、教科書などを例に論じる。

問題三

論述問題につき割愛。

【漢文学】

問題一

(一)

【書き下し文】魯の哀公仲尼に問ひて曰はく、「衛に悪(みに)くき人有り。哀駘佗

と曰ふ。丈夫之と処る者は思ひて去ること能はず。婦人之を見ては父母に請ひて『人の婦と為らんよりは、寧ろ夫子の妾と為らん』と曰ふ者、十もて数へて未だ止まざるなり。未だ嘗て其の唱ふるを聞く者有らず。常に人に和するのみ」。

【口語訳】魯の哀公が孔子に尋ねた。「衛に容貌の醜い者がいる。名を哀駘佗と言ふ。男は彼と一緒に居ると、心引かれて離れられなくなる。女は、父母に『誰か他の人の妻になるよりは、あの方の妾になりたい』と請う者が、何十人では数え切れないほどいる。哀駘佗が自ら何かを言い出したところを見た者はなく、いつも他人に調子をあわせているばかりだ。」

(二) 哀駘佗は、外面こそ醜いが、内面には万物の生生変化に調和・順応し、また万物を自然に惹きつけ順わせるような才徳を、十分に備えた人物であるから。

(三) ①注…郭象 疏…成玄英

②林希逸『莊子膚齋口義』

問題二

論述問題につき割愛。

二〇二六年度二月入試（博士後期・専門科目） 解答・解答例

【古典国文学】

一

問一 今こむといひしはかりに長月の有明の月を待出つる哉

問二 女が男を待っている期間が、一晚か、数ヶ月かの二説が示されている。一晚の場合は、女が、男が来るのを期待して晩秋の長い一夜を待ち続けたが男は来ず、有明の月が出るまでになってしまったという解釈になる。しかし、この説はとらない。ここでは、もう一方の説をとり、女は男が来るのを何か月も待ち続け、とうとう秋も終わりの九月の有明の月が出るまでになってしまった、との意で解釈している。

問三 室町時代の連歌師。勅撰集に準じられた連歌選集『新撰菟玖波集』を選ぶ。

肖柏・宗長と行った『水無瀬三吟百韻』は著名。東常縁から古今伝授を受け、古典にも通じた。

二

論述問題につき割愛。

【近代国文学】

一

問一 大正六年「城の崎にて」「佐々木の場合」で文壇に復帰した志賀は、昭和三年『暗夜行路』の執筆を中断し、ふたたび活動を休止することになる。二度目の活動休止は昭和八年まで続き、これはプロレタリア文学の全盛期に対応している。この活動休止に「実生活をしやぶり尽した人間の静謐と手近かに表現の材料を失った小説家の苦痛」を確認した小林秀雄の「私小説論」は、後の文学史理解に大きな影響を与えた。

問二 大正十年代、中村武羅夫の「本格小説と心境小説と」を契機として、私小説（心境小説）と本格小説とが、対比的に議論されるようになった。本格小説は外国文学の傑作を範として、物語内容の虚構性や複雑に構成されたプロットを主たる特徴としてイメージされた。谷崎はそうした小説を積極的に支持し、また自ら実行する作家として理解されていた。そこに生じたのが芥川龍之介との論争で、「話」らしい話のない小説が「最も純粹な小説」であるとすると芥川に対し、谷崎は「饒舌録」で自らの見解を提示した。

二

論述問題につき割愛。

【国語学】

問題一

ア

江戸時代あるいは明治時代の文語文について、

①ジャンルごとにどのような特徴を持った文語文が用いられたか。

②平安時代の文語とどのような点に相違が見られるか。

を中心に、文法史および文章史的な位置づけを試みる。

イ

古代における古典中国語（漢文）との接触、あるいは江戸時代以降のオランダ語・英語などとの接触のいずれかを選択したうえで、

①その外国語との接触が、どのような語種に影響を与えたか。

②その外国語との接触は、どのような意味分野の語彙に顕著に見られるか。などを中心に、通時的・共時的双方の観点から、実例も挙げつつ論じる。

問題二

論述問題につき割愛。

【漢文学】

問題一

(一)

【書き下し文】

山客 龍鍾として 耕すことを解せず

軒を開き 危坐して 陰晴を見る

前江 後嶺 雲気通じ

万壑 千林 雨声を送る

海 竹枝を圧して 低れ復た挙ぐ

風 山角を吹きて 晦くして還た明らかなり

嫌はず 屋漏 乾きたる処無きを

正に要す 群龍の甲兵を洗はんことを

【口語訳】山路を旅して来た私は、すっかり疲れ果て、田畑を耕す術も知らぬ。窓を開け、居住まいを正して天気を見る。すると目の前の川や、後ろの嶺からは雲の気が通い、あちこちの谷や林からは、雨の音が聞こえてくる。海の水を巻き上げたような猛烈な雨に打たれ、竹の枝は上下を繰り返し、風に吹かれて雲が行き来する山の端は、暗くなったり明るくなったり。私のあばら屋は、雨漏りのために乾いた場所もないほどだが、それも構わぬ。それよりも龍の群れがもたらし

たかのようなこの激しい雨が、戦乱をきれいに洗い流してほしいものだ。

(二) 半切のように、二字の音を合わせて、他の一字の音を表した語である。したがって「龍」字の声母、「鍾」字の韻母を合わせ、「癡」字を表し、病む・老い衰える意となる。

(三) 「海」が「竹枝」を「壓」すとは不自然な表現であるが、これは杜甫の賦に「四海の水皆立つ」、蘇軾の詩に「天外の黒風 海を吹きて立つ」とある例を踏まえ、逆巻く海がそのまま暴風雨となってやってきたかのように誇張し、新奇さを狙った措辞である。

問題二

論述問題につき割愛。